優秀賞

本当にありがとう

兵庫県 神戸市立福池小学校六年　柚木 康生

ぼくが一年生になってすぐの頃、アマガエルとの出会いがあった。その日は雨がたくさんふっていた。ぼくは家で妹とテレビを見ていた。

「カエルがいるぞー。」

と仕事から帰宅したお父さんの声が玄関から聞こえた。ぼくは急いで向かった。そこにはインターフォンにくっついたアマガエルがいた。実際にカエルを見たのはこの日が初めてだった。ぼくはとてもかわいいと思った。それまでは興味もなかったし、カエルにあまり良い印象もなかった。けど一目見て絶対に飼いたいと思った。お父さんと一緒にあみでつかまえてケースに入れた。そのときたまたまいたハエもつかまえてあげてみると食べてくれた。その姿は忍者みたいでかっこよかった。

「カエルは動くものしか食べないから育てるのはすごく大変だよ？」

とお父さんは言った。それでもぼくはこのアマガエルを育ててみたいと強く思った。

五月六日。この日を忘れない様にごろうと名付けた。それからごろうのために虫をつかまえる日々が始まった。正直、ぼくは虫が苦手だった。それでも毎日虫とりあみを持ってごろうの食べれそうな虫を探しに出かけた。

だんだん寒くなってきて虫もいなくなった。ごろうもじっとして動かない事が増えてきた。その頃のぼくはまだカエルの知識もなくてどうすればいいのか分からなかった。これが冬眠なのかな？元気に春をむかえてくれるのかな？毎日不安だったけど見守ることしかぼくには出来なかった。

そして三月、ごろうは目を覚ますことなくずっと眠ったままになった。涙が止まらなかった。悲しい気持ちとくやしい気持ちでぐちゃぐちゃだった。

ごろうとサヨナラをしてからも、ぼくはどんどんカエルを好きになっていった。

あれから四年間、ぼくはカエルの事をたくさん勉強した。友達からもカエル博士と呼ばれるぐらいいっぱい学んだ。

そして五年生の秋、ぼくはカエルを飼うことになった。次はちゃんと育ててあげられる！そう思えたからだ。温度のこと、エサのこと、体質のこと、きっと今度は大丈夫。だから空から成長したぼくを見ていてほしいと思う。ごろうの分まで絶対に長生きさせてあげるから。

ごろう、ぼくと出会ってくれて本当に、本当にありがとう。